

近刊紹介

『中ソ対立と現代』

中嶋 嶺雄著

中央公論社 昭和五十三年二月

定価一、七〇〇円

(一)

中嶋嶺雄氏にとって中ソ対立は、現代中国研究の先駆的名著『現代中国論』(一九六四年、青木書店)以来の一貫した主題である。その意味で今回国際環境叢書(中央公論社)の一つとして出された『中ソ対立と現代』は、中嶋氏の中ソ対立に対する評価の集大成ともいえるべき力作である。

中嶋氏が本書を通じて明らかにしようとしたことは、一言でいえば、一九五〇年代前半のいわゆる中ソ一枚岩の団結は、表面的には友好ムード一色であったが、その内実は空虚なものであり、そこには数多くの矛盾、緊張が内包されていたということである。このよ

うな立場から著者は、中華人民共和国成立前後の時期、朝鮮戦争の時期、高崗事件の時期等を取り上げ、いずれの時期においても、中国の認識、行動の背後にはソ連に対する敵愾心があり、そのような対ソ意識から中国は一貫してアジアの諸問題に対処してきたと主張している。いいかえれば著者は、現在進行し

つつある中ソ対立を眺めつつ、遡及的に一九五〇年代前半にまでさかのぼり、その時期の「中ソ一枚岩」の神話のペールを剥がそうとしているのである。もつとも、このような立場は以前からなかったわけではない。著者も言うように、一九五〇年代における欧米の共産圏研究者は大方このような立場をとっていたし、現在でも多くはないにしてもこの説をとる研究者あるいはジャーナリストがいる。例えば『中ソ戦争』(原題 War Between Russia and China)の著者であるジャーナリストのハリソン・E・ソールズベリーは、その代表的人物といえるであろう。しかしこのような説は、従来主張されてきたわりにはその本格的・実証的な研究がほとんどなされてきていないことも事実である。その主たる原因は、資料の不足にあったと考えられる。つまりそのような問題設定は行いえても、それは資料の不足ゆえに傍証に頼るきわめて脱得力の乏しい議論にならざるをえなかったのである。中嶋氏は、本書の執筆理由の一つとして最近未公開資料が公開されるようになったことを挙げている。このことは、これまでこの問題に関する資料がいかに乏しかったかを示している。また、中ソ両国が現在ですら一九五〇年代の中ソ一枚岩それ自体を真正面から否定していないことも、

これまで本書のような研究が本格的に行われなかつたことの理由であるのかもしれない。

要するに中嶋氏は、現代史の評価がほぼ確定された中ソ一枚岩の時期に再びメスを入れることにより、その神話を実証的・分析的に突き崩し、現在進行する中ソ対立を中華人民共和國成立直前から一貫したものと把握しようとする、きわめて野心的・挑戦的な視角を提示しているのである。この点は、著者の学問的開拓精神の旺盛さを物語るものである。

(二)

本書は、次のような八つの章から成り立っている。

- 序章 中ソ対立の構造と「地政学」
- 一章 アジアの冷戦と中ソ関係
- 二章 米中関係の心理と宿命
- 三章 毛沢東とスターリン——中ソ友好同盟の真実と虚構——
- 四章 朝鮮戦争と中ソ対立
- 五章 高岡事件と東北をめぐる中ソ関係
- 六章 中ソ関係の緩和と破局
- 終章 中ソ対立の神話

しかし著者の問題意識は、中ソ一枚岩の形成過程、ならびに中ソ一枚岩時期の中ソ関係にある。したがって、右の八章のうち第三章

・第四章・第五章が実質的に本書の中核部分となっている。しかも各章の内容については、著者自身がまえがきで要領よくまとめられている。したがって、ここでは主としてこの三つの章を取り上げ、その論旨を検討していきたいと思う。

まず第三章では、大別して次の三つの問題が扱われている。第一は、一九四五年にスターリンと蔣介石との間に結ばれた中ソ友好同盟条約に関する問題であり、第二は、中国共産党が向ソ一辺倒政策を採るに至った背景についてであり、第三は、一九五〇年にスターリンと毛沢東との間に結ばれた中ソ友好同盟相互援助条約に関する問題である。

第一の一九四五年の中ソ条約について、著者は、この条約がソ連と蔣介石政権との間に結ばれ、しかもその内容がソ連の多くの権益を容認するものであったことを指摘しつつ、こうしたソ連の措置に対して毛沢東がいかに強い不満を抱いていたかを述べている。またそれとの関連で著者は、スターリンがこの時期いかに中国共産党を過小評価していたかについても分析している。第二の中国共産党が向ソ一辺倒政策を採るに至った背景として、著者は次の三点を指摘している。第一に、中国共産党はこの時期アメリカに対して有和的な態度をとっていたが、これ以上それを進め

るとスターリンからの報復を招くかもしれないという懸念があったこと、第二に、当時の中国共産党内には劉少奇を中心とする対米宥和推進グループがあり、毛沢東は党内の団結と自らの指導権を強固にするためソ連との団結によりその目的を達成しようとしたこと、

第三に、対ソ・ナショナルリズムを実現するための戦術的配慮が毛沢東にあったことがそれである。第三の一九五〇年の中ソ条約について、著者は、それが結ばれるまでの二カ月以上にわたる毛沢東とソ連側との折衝を分析しつつ、この条約をめぐる中ソ間の葛藤の存在を指摘している。また著者は、この直後に結ばれた中ソ間のいくつかの経済協力協定についても、その内実は中国側にとってきわめて不満の残るものであったことを指摘している。

以上が第三章の要約であるが、このうち著者の中ソ友好同盟相互援助条約に関する分析の中に、一つ問題点が潜んでいるように思われる。それは、著者がこの条約の締結交渉に内包された中ソ間の葛藤、とりわけ東北をめぐる領土問題、対中経済援助額問題を強調するあまり、この条約それ自体の性格を軽視しているように思われることである。なぜなら、一九五〇年に締結された中ソ条約の主たる性格は、冷戦下における安全保障上の配慮

から生まれたイデオロギー上の団結を目的とするという点にあった。したがって、たとえ前述のような葛藤が中ソ間に存在していたとしても、それはこの条約の二次的側面ではないように思われるからである。

続く第四章では、朝鮮戦争への中国の参戦理由が中ソ対立との関連で論じられている。すなわち著者は、朝鮮戦争の勃発は中国にとって予想外のことであったが、それにもかかわらず中国が参戦したのは、この時期の中ソ関係は險悪であり、もし中国自身が参戦しなければソ連が機に乗じて東北に進駐しかねないという危機が中国側にあったからである、と論じている。しかも著者によれば、この時期東北を支配していたのは親ソ的な高崗であり、このことは党中央の参戦決定を促進させることになった。

ところでこのような著者の論理的展開の中に、一つ問題点が含まれているように思われる。それは、著者が中国の参戦理由としての対ソ危機感を、朝鮮戦争時におけるソ連の対中援助額についての中国側の不満から引き出していることである。しかし、中国が参戦時にソ連の対中援助額に大いに不満をもったということは、参戦以前に中国はソ連に対して大盤の援助を期待していたということである。このことは、中国が参戦直前にソ連に対

して不信ではなくむしろ期待感をもっていたことになる。その意味で、中嶋氏の見解は今日の中ソ対立の観点をあまりにも強くこの時期に導入しているといわざるをえない。

第五章で著者は、一九五〇年代前半中国において起こった高崗事件を中ソ対立の文脈のなかで位置づけている。すなわち著者によれば、当時東北を地盤に活動していた高崗とソ連とはきわめて親密な関係にあり、しかも高崗は党中央の意思を無視して単独で行動していた。そこで中国共産党中央は、高崗の東北「独立王国」化とソ連の東北支配を防ぐために高崗を失脚させた、というのである。つまり東北の保全、とりわけソ連のその地域に対する影響力を緩和させることが、当時の中国にとって死活問題だったということになる。こうした高崗事件の評価は、今日でも必ずしも定着しているわけではない。この事件を主として中国共産党内の政策論争あるいは権力闘争の産物として理解しようとする見解も存在する。むしろ、この事件の多面的性格をどのように総合していくかが今後の課題となるであろう。とりわけ中嶋氏の場合には、ソ連は中国政府との同盟関係を犠牲にしてまで東北に親ソ政権をつくる必要があったのか、あるいは高崗とソ連の親密な関係が実際に中ソ対立を引き起こしていたのか、といったよう

な問題が将来の課題として残るであろう。

(三)

従来中ソ対立の起点は、その民族的・歴史的背景を別として中華人民共和国成立以後の脈絡の中で考えるならば、一般には一九五六年二月のソ連共産党第二〇回党大会における、ソ連のいわゆる新路線とスターリン批判にあるといわれている。すなわち、この時期以降、中ソ両共産党の間には、社会主義への移行方法、平和共存政策等に関するイデオロギー上の相違が潜在していた。そして中国は、大躍進運動にみられるように、現実において社会主義建設のソ連モデルから脱皮を開始したのであった。イデオロギー上の対立は一九六〇年には公然化し、六三年からは公開論争に発展したのであった。しかもこの論争は、第二次台湾海峡危機、中印国境紛争、キャンブ・デービッド会談等に対する両者の認識の相違、さらには両国の国境問題を通して、単なるイデオロギー上の対立から国家的利害の対立にまで発展していったのである。

これに対して中嶋氏の基本的立場は、中華人民共和国成立前後の中ソ一枚岩の時期にすでに両国間は緊張関係にあり、この緊張関係こそが、その後には延長され、今日のような激しい中ソ対立の根源となつているということである。

あった。いかえれば、著者は、中ソ対立を一九四九年以来一貫して存在してきたものとしてとらえている。しかしこのような把握の仕方は、中ソ一枚岩時期の中ソ間の緊張・葛藤を、その後の中ソ対立と同一レベルで論じているという点で問題を含んでいるように思われる。以下この点についてさらに具体的に論じることしよう。

著者は本書のなかで、中ソ友好同盟相互援助条約の締結交渉、朝鮮戦争への中国の参戦、そして高岡事件に際して、中ソ間には領土問題、とりわけ東北(旧滿洲)をめぐる、あるいは中国への経済援助額をめぐる葛藤のあったことを強調している。このことは、著者のいう中ソ一枚岩時期の中ソ対立が領土、経済援助額をめぐる国家的利害に関する問題であったことを示している。しかし、このことから中ソ一枚岩の神話を突き崩そうとする著者の方法には、一九四〇年代後半から五〇年代初頭にかけての東西冷戦という国際政治上の文脈についての考慮が欠如しているように思われる。

すなわち、中ソ一枚岩が形成された時期は、社会主義陣営と資本主義陣営という二つのイデオロギーの異なる体制がお互いに鎗を削る東西冷戦の真っ最中であり、中ソの団結は「帝國主義」勢力に対抗するための安全保

障上の配慮から生まれた社会主義陣営内の団結、いかえればイデオロギー・体制上の団結の産物だったのである。要するに、著者の分析している東北の領土問題、経済援助額をめぐる実際に存在した葛藤は冷戦という背景において理解されなくてはならない、というのが私の主張である。

したがって、中ソ一枚岩を支えていたイデオロギー上の一体化が一九五六年に崩れはじめるとともに、東西冷戦構造それ自体が緩和の方向へ向かいはじめると、しかも中国の国力が増大しはじめると、中ソ間に以前から潜在的にあった領土、経済援助額の問題、民族的対立が、イデオロギー上の対立とあいまって一挙に噴出してくることになったのである。

したがって、領土、経済援助額に関して中ソ間に存在した葛藤は、中ソ一枚岩にとって「副次的矛盾」でしかなく、冷戦こそが「主要矛盾」だったのである。その意味で、もし著者が中ソ一枚岩の神話を突き崩そうとするならば、当時の中ソ両国にとって領土、経済援助額問題が、冷戦以上に死活問題であったことを論証しなければならないであろう。

さて、私はこの書評のなかで、主として本書の第三章、第四章、第五章を中心に紹介してきたが、これ以外にも注目すべき章がいくつかある。例えば、中ソの対立構造を四つに分け、そのそれぞれが重層的に一体化しているところに中ソ対立があるとする序章の議論、あるいは新中国成立直後に、アメリカは中ソ間の亀裂を利用して中国の「チトー化」を進めるべきであったとする第二章の議論は、きわめて興味深い。また、第二次台湾海峡危機を引き起こした中国側の意図を分析した第六章第三節の議論も見逃すことはできない。すなわちそこでは、中国側の意図が、従来支那の見解であった大躍進運動との関連においてではなく、中ソ対立との関連において論じられているのである。

以上において私は、本書の内容を紹介し、かつ本書の問題点を指摘してきた。私がかつ述べてきた本書の問題点は、もとより本書の意義を否定するものではない。なぜなら、本書の最大の意義は、中ソ一枚岩の時期にさえ、中ソ間には各種の葛藤が存在していたことを分析的に証明していることであるからである。(慶応大学大学院博士課程 国分良成)

『冷戦の起源—戦後アジア』

の国際環境』

永井陽之助著

一九七八年、中央公論社刊

定価二、〇〇〇円

本書は文部省特定研究「国際環境」に関する